

# じっきょう 家庭科資料

(通巻 63号)

## みんなで家庭科を

No. 48

### 巻頭

「日本の母子手帳を変えよう」プロジェクトから生まれた親子健康手帳

### もくじ／

- 「日本の母子手帳を変えよう」プロジェクトから生まれた親子健康手帳 … 1  
 ソフリエのすすめ …………… 7  
 授業実践例紹介① 3年選択「被服製作」での授業実践 …… 11  
 授業実践例紹介② 「福祉調理」に関する授業実践 …… 16

## 「日本の母子手帳を変えよう」プロジェクトから生まれた親子健康手帳

博報堂生活総合研究所 上席研究員 笥 裕介

### 1. 厳しさを増す育児環境、広がる育児格差

母子健康手帳とは、戦時中の1942年に妊産婦手帳という名で最初に発行された母子の健康を守る日本発の保健システムです。当時は衛生状態や食事情が悪く、妊産婦や乳児の死亡率が高かったため、無事な出産を支援することを目的に配布されました。この仕組みの成果は、乳児死亡率に如実に現れています。1950年には開発途上国並みの60.1（出生1,000人あたり60.1人が死亡）だったものが、2006年には先進国トップクラスの2.6まで低下しました。日本の乳児死亡率の低下に貢献した優れた母子保健システムだと海外からの評価も高く、タイ、インドネシア、ケニアなど世界各国にも普及し始めています。

乳児死亡率が示す通り、たしかに日本の医療環境は劇的に進歩しました。妊娠・出産の安全性は高まりました。しかし、その一方、近年日本の母子を取

り巻く育児環境は急激に変化しています。共働き世帯が増加し、母が専業主婦で父が働く世帯を逆転しました。女性が働きながら育児するのが当たり前の時代です。産婦人科や小児科が不足し、母と子どもの健康が脅かされています。産後うつが増加が社会問題化しています。虐待や育児放棄に関するニュースをたびたび目にします。日本には戦時中の衛生環境、栄養環境とは異なる新たな社会課題が浮上しているのです。

また、育児の格差の問題は深刻です。経済的、社会的に自立する前の10代での出産も珍しくありません。離婚の増加などにより、母子家庭の世帯も増加しています。自分や子どもの健康面の知識が不足していたり、役所に届出をして母子健康手帳を受け取ることを認識していなかったり、行政が提供する健診や各種手当の存在を知らなかったりなど、必要な情報が著しく不足している妊産婦も多いようです。また、経済面、情報面では恵まれていても、妊

娠・出産後の職場復帰を希望しても、保育所の不足などでその希望をかなえることができない女性も増えています。

こうした現代社会の育児環境をあらためて見直すと、母子健康手帳には、健診や予防接種の記録をつける以外にも、できることがもっとあるのではないだろうか。そんな思いから始まったのが「日本の母子手帳を変えよう」プロジェクトです。

## 2. お母さんお父さんの声から生まれた手帳

母子健康手帳の内容は厚生労働省令で定められ、市区町村ごとに発行されます。内容は、記載が義務づけられる「必要記載事項」と各市区町村が独自で作成できる「任意記載事項」の二つで構成されます。市区町村が自由に記載できる部分に関しても、今までの母子健康手帳は交付する側の自治体や医療関係者の視点で造られているものがほとんどでした。そのため、育児をとりまく環境が変化してもコンテンツやデザインにはほとんど進化がみられません。そこで、新手帳の作成のために、インターネットやソーシャルメディア（twitter）を通じて全国の生活者（父母）より母子健康手帳の使い勝手や期待、育児の悩みなどに関する徹底的な意見収集を行いました。また、産婦人科がない離島で暮らすシングルマザー、東京在住の中国人ママ、学生結婚夫婦など、特殊な境遇のユーザーへの個別のインタビューも行い、少数派の声も可能な限り耳を傾けました。特に現代の子育てには欠かせない、インターネットを通じた意見の収集は積極的に行いました。そこで



【市民から声を募る「日本の母子手帳を変えよう」ウェブページ】

行ったのが、「母子手帳一日一問」という調査方法です。毎日、インターネットおよびソーシャルメディアを通じて、母子手帳や育児に関する質問を全国のお母さん、お父さんに投げかけます。「母子手帳にもっと欲しいページは?」「あなたの育児の思い出は?」「育児と仕事の両立のコツは?難しいところは?」「母子手帳の表紙はどんなものが良い?」、このような質問です。お母さんはこの質問に回答するとともに、ウェブサイト上で他のお母さんの意見を聞いたり、意見を交換したりなどのコミュニケーションをとることもできます。

こうした声から、今の時代に求められる母子手帳の機能を探り、2011年1月に新・母子健康手帳の試作品が完成しました。この手帳は従来のものと比べて五つの機能が強化されました。



【母子健康手帳、あらため親子健康手帳】

### 3. 子どもの医療歴やお薬歴を成人まで残す 【健康カルテ】機能

生活者からの要望が一番多かったのが、「子どもの健康に関する記録ページを充実させて欲しい」というものでした。予防接種、病気、学校の健康診断、お薬など、子どもの健康に関することは、色々な手帳、書類に別々に記録されています。子どもの健康を、一貫して記録し続けるためのフォーマットがないのです。母子手帳がその役割を果たすべき、そんな声が多数寄せられました。母子健康手帳を子どもの健康カルテにしようというアイデアです。妊娠期から乳児期・幼児期まで、子どもの健康に関することを記入するページを豊富に用意しました。

また、母子健康手帳がもっとも活躍するのが予防接種の場面です。しかし、従来の手帳は予防接種の記録欄が不十分でした。複雑化する予防接種に対応できるようページを増やし、記入できる予防接種の

種類も増やしました。また、予防接種をいつ受けさせるべきなのか?何回必要なのか?任意なのか?これはお母さんにとって悩みの種になるものだという声が多数寄せられました。そこで、見開きで一目でわかる予防接種カレンダーを作成しました。



【子どもの成長記録ページ】

### 4. 必須な情報を厳選し読みやすく編集している 【必見必読】機能

「母子手帳ってママのセーフティーネットなんですね」。母子健康手帳の新しい役割、機能を議論している時に寄せられたあるお母さんの一言、それがこのプロジェクトの方向性を大きく決めました。どんなに境遇が異なっても、同じ自治体に住んでいる限り、全ての妊婦が同じ母子健康手帳を受け取ります。この手帳には、妊娠・出産・育児に関して、誰もが知っておくべき厳選された情報が掲載されていなければならないのです。それこそが新しい母子健康手帳が果たすべき「母親のセーフティーネット」という役割です。

通常の手帳にも行政発の大切な情報が数多く掲載されています。しかし、多くのお母さんから「その情報が載っていることを知らなかった」という声を耳にしました。大切な情報が読んでもらえていないのです。いくら掲載されていても、伝わらなければ意味がありません。一目で情報を理解できるように、わかりやすいキーワード、平易な文章、読むことを促すイラストで表現しました。また、現状の手帳の情報が目に触れにくい原因の一つが、情報のレイアウトです。ほとんどの場合、前半50ページが記録、後半50ページが読み物の構成になっています。前半は健診の時などに頻繁に開きます。ただし、後半はもらった時には流し読みをしても、その後は二度と開かない、そんなお母さんが多いようです。そこ

で、必要な時期に必要な情報が届くように情報レイアウトを工夫しました。妊娠期の記録の前に妊娠期に必要な情報を掲載し、幼児期の記録の前に幼児期に必要な情報を掲載する、そのようなページ構成です。こうした工夫で「読みやすくなった」「飽きずに楽しみながら読めた」、そんな声を多数もらいました。



【キーワード、平易な文章、イラストによる必須知識ページ】

### 5. 育児の喜びを増やし不安を減らす 【癒し励まし】機能

産後うつが増加があらわしているように、育児に関する精神的負担が大きい時代です。そんなお母さんの厳しい精神状態を少しでも手助けできるコンテンツは何だろう？ そのような議論を繰り返しました。そこで誕生したのが、「お祝いメッセージ」「記念日カレンダー」「育児の名言」という三つのオリジナルコンテンツです。

「お祝いメッセージ」とは、赤ちゃんが誕生した際に、自分を含めて、父、祖父母、医師や看護師など、色々な方にメッセージを書いてもらう寄せ書きのようなページです。

「記念日カレンダー」とは、子どもに関する記念日を記入するページです。これもお母さんからの要望が非常に多かったコンテンツです。「初めて胎動を感じた日」「はいはいを始めた日」「立ち上がった日」「ママと呼んでくれた日」、お母さんは色々な記念日を作りたいようです。

「育児の名言」とは、子育てに疲れた際に読み返してもらいたい素敵な一言です。シェイクスピア、内村鑑三のような偉人から、産婦人科医の竹内正人先生、母子健康手帳研究の第一人者である大阪大学の中村安秀教授、そして全国のお母さんお父さんの声をページの下に書き入れました。



【子どもの誕生を祝う寄せ書きページ】



【オリジナル記念日カレンダー】



【母を癒す育児の名言】

### 6. お母さんだけでなくお父さんも参加できる 【男女共育】機能

お母さんの育児の精神的負担の軽減に母子健康手帳が劇的に役立つことはないかもしれませんが。しかし、この手帳が育児に悩んだとき、心が折れそうになったとき、何度も立ち返る場所となることをめざしました。

共働き世帯が一般化したこともあり、パパが子育て

てに参加するのが当たり前の時代です。「イクメン」という言葉も随分定着しました。この母子健康手帳は通称を「親子健康手帳」と名づけました（あくまで、正式名称は母子保健法に定められている「母子健康手帳」です）。母子健康手帳では、父には関係がないものという認識を与えがちなので、その認識を改めてもらうための仕掛けです。

また、表紙や中に地球上のさまざまな動植物の両親と子どものイラストを描きました。さらに、「パパになる準備」「乳児期のパパ力」「お父さんの心得」など、父親向けの情報も多数掲載しました。「母のもの」と認識されがちな母子健康手帳を、「父を含めた親子のもの」とであると捉え直し、男性の積極的な育児参加を促すためのデザインです。



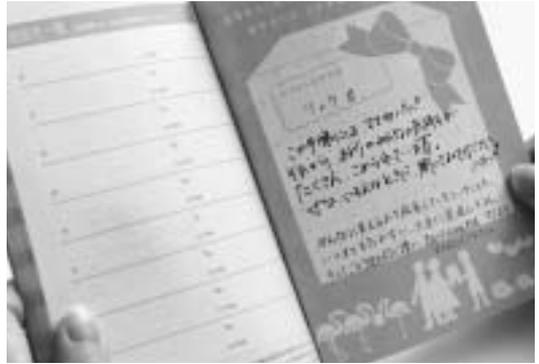
【父親向けコンテンツも充実】

## 7. 知識・経験を伝え次の親を育てる 【育次】機能

育児の記憶を、次世代の親となる子どもに継承していくための機能を充実させました。通常の手帳は子どもが6歳になると役割を終えます。しかし、新しい手帳は成人までの成長を記録できるページを設け、小学校以降の必須知識も掲載しました。子どもの身長や体重、健康の記録などは、生まれてから成人まで途切れることがなく、一箇所に記録されていたほうが何かと便利に違いありません。小学校以降の必須知識は母親・父親が読むだけでなく、子どもに渡して読んでもらう、もしくは親子で一緒に読んでもらうことをめざしました。

あなた自身の母子手帳がどこにあるかご存知でしょうか？ 実家の棚の奥にしまわれているのでしょうか？ 母子手帳は母親にとって非常に大切なアイテムです。母親が一生大切に保管しているとい

うケースも少なくありません。自分の娘が妊娠したときに、娘の母子手帳を渡してあげる。そんなケースも多いようです。新しい手帳には、子どもの一人暮らし、成人、結婚、妊娠などの節目にメッセージを添えて、子育ての思い出と医療記録を子どもに渡すための「ギフトページ」を用意しました。しっかりと継承された健康の記録と思い出は、将来子どもが親になる時にきっと役に立つでしょう。



【子どもに贈る「ギフトページ」】

## 8. 試作・改良の繰り返しで進化する 親子健康手帳

2011年1月に完成した親子健康手帳の試作品を改良するためのワークショップが東京・赤坂と島根県海士町（隠岐中ノ島）で行われました。都市部で暮らすお母さんと中山間・離島で暮らすお母さんでは、育児スタイルが全く異なります。そこでその極端な例として、大都市と離島の2箇所で見聞を聞くことにしたのです。それぞれの地域在住のお母さんや保健師、医師に手帳を見てもらい、良い点や悪い点、改善が必要な点などの意見を多数聴取しました。

こうして完成した2011年版は4月より島根県海士町、栃木県茂木町にて使用されています。また、この母子健康手帳が完成した直後の3月11日に東日本大震災が発生しました。この未曾有の災害に対して、私も含めてこのプロジェクトの関係者は、現地の支援活動に取り組みました。その中で、被災地から、母子健康手帳が津波に流されてしまい、困っている妊婦や育児中の母が大勢いるという声が聞こえてきました。そこで、陸前高田市、釜石市、大船渡市、大槌町、福島県などに提供し、被災地支援に活用していただきました。

2011年秋からは新たに32の自治体で使用が始

